

第57回愛知県総合教育センター研究発表会
テーマ「学校の組織力を高める」
平成29年11月28日（火） 愛知県総合教育センター

第57回愛知県総合教育センター研究発表会を、「学校の組織力を高める」というテーマの下で、愛知県教育委員会則竹伸也教育委員をはじめ、多数の来賓及び県内から500人を超える参加者を迎え、開催した。以下にこれらの概要を紹介する。

1 開会行事次第

- ・開会のことば
- ・所長挨拶
- ・愛知県教育委員会挨拶
- ・来賓紹介
- ・基調提案
- ・閉会のことば

2 講演

- ◆演題 「カリキュラムマネジメントで学校の力を高める」
- ◆講師 岐阜大学大学院 准教授
田村知子氏

3 研究発表・研究協議

次の各研究について発表と協議を行った。なお、各研究の詳しい内容については、当ウェブページ「研究紀要第107集（平成30年4月2日掲載予定）」を御覧ください。

◇第1部会 道德教育（小中高特）

道德教育の推進の在り方に関する研究（中間報告）

【発表の概要】

「道德教育の推進の在り方に関する研究」についての中間報告を行った。研究協力委員が所属校において実践した、推進体制づくりと指導方法の工夫と評価の取組について報告した。推進体制づくりについては、道德教育推進教師が中心となり学年部や生徒指導部と連携して取り組んだ、全体計画作成や授業づくりについて発表した。指導方法と評価については、中学校での問題解決的な指導の実践と小学校での道德ノートやOPPシートを活用した授業改善の実践を発表した。OPPシートを活用した実践では、実際の児童の記述から、教師が評価した観点や評価記述を一つの例として提案した。高等学校の道德教育については、小・中学校での道德教育とのつながりを意識したマイクロインサクションを取り入れた実践として、「生命の尊さ」を扱った科目「現代社会」での取組を発表した。

グループ協議では、複数の校種を含む5名程度の小グループで、「考え、議論する道德」を目指した取組について、現場の実情に関する報告を含めて協議を行った。各校種での課題や効果を出し合う中で、さまざまな意見交換が行われた。推進体制づくりについては、校内研修の充実、ローテーション道德の実施、教材の蓄積等の実践から、全校体制で道德教育についての意識を高めることが重要である等の意見が出された。授業づくりについては、発問や板書の工夫、ネームプレートの活用、効果的な座席などが話題になった。また、「OPPシートの活用」について、評価に取り組む上で有効であるとの意見も出された。

◇第2部会 教育相談（小中高特）

組織的な教育相談における教員の力量向上に関する研究（中間報告）

【発表の概要】

「組織的な教育相談における教員の力量向上に関する研究」についての中間報告を行った。最初に、本研究の仮説モデル「チーム支援体制構築過程」の「問題解決」と「組織づくり」の在り方を検証する研究の意義を明らかにした。そして、経験の浅い教員が、教育相談に関する力量を向上させるとともに、教育相談を組織で行うことへの意識を高めて共通理解を図りながら問題を解決していく方策を見いだすという研究の目的、並びに開発した「実践事例ワーク」について説明した。

分科会は、実践事例と参加者の校種における実態を踏まえ、小・中学校と高等学校に分かれて実践事例を用いたグループワークを実際に体験した。小・中学校は各1グループの計2グループ、高等学校は4グループを編成し、各グループにはファシリテーターとして研究協力委員を1名ずつ配置した。

アイスブレイクの後、グループに与えられた事例を各自で読み、個人の「見立て」を行った。付箋紙に「見立て」のキーワードを記入し、その後、説明しながら付箋を模造紙に貼っていった。付箋紙を整理しながら、グループの「見立て」を決定した。その際、他者の様子や気持ちにも注目することの大切さも伝えた。最後にグループの「見立て」に応じた「対応策」を立てた。グループワーク終了後はグループ発表を行い、振り返りをして研究協議を終了した。

◇第3部会 外国語科指導法（小中高特）

CAN-DOリストの活用を通じた外国語科指導法に関する研究

【発表の概要】

最初に基調提案を行い、その後8名の研究協力委員による研究報告を行った。基調提案では、本研究の趣旨説明として、小学校、中学校の新学習指導要領及び高等学校の次期学習指導要領の目指す方向性を見据え、小学校、中学校、高等学校で一貫した目標を実現するために、学校段階間の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという点から、CAN-DOリストの活用の必要性を中心に述べた。

研究報告においては、小学校、中学校、高等学校の外国語科指導における連携・接続に関する、各地区の先進的な取組と共通する課題について報告し、学校段階間接続の視点からの実践例や、CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価の改善への方策を提案した。

その後、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学（学生）の複数の校種を含むグループで、「CAN-DOリストの活用」「小中高の接続に向けて」をテーマとして、協議及び発表を行った。研究発表についての質問、意見及び提案を中心とした意見交流を通して、各学校における現状や課題についても各校種間で情報を共有した。「小中高連携」という内容に沿って、各グループの「連携役」を研究協力委員及び所員が中心となり務めた。

2グループの発表と全体共有において、「小学校外国語科の指導と評価の実施に向けて、学習到達目標（CAN-DO）に基づいた指導内容と評価方法を検討するべきである」という意見や、「学習到達目標を各校種間で共有することの重要性を感じた」という感想が述べられ、小学校、中学校、高等学校をつなぐために、CAN-DOリストが果たす役割について全体で共有することができた。

◇第4部会 ICT教育（小中高特）

多様な校種におけるICTを活用した授業実践の報告

【発表の概要】

第4部会ICT教育「多様な校種におけるICTを活用した授業実践の報告」は、産業教育の充実に関する研究（農業、水産）、産業教育の充実に関する研究（工業、商業）、情報教育の充実に関する研究（ICT授業活用に関する研究）で実践されたICTを活用した授業の報告を、全体会の後、合計15名の研究協力委員がA～Cの3会場に分かれて行った。

全体会では、それぞれの研究主務者が研究の目的や概要、発表内容を報告した。その後、各講義室に分かれて分科会を実施した。

A会場では、農業高校や総合学科の高校におけるICTを活用した農業実習についての報告や、先進的にICT環境が整っている小学校におけるICTを活用した授業の考察及び算数の授業の実践報告をした。また、聾学校におけるタブレット端末の活用や、高校数学の協働学習にICTを活用した授業実践の報告をした。

B会場では、特別支援学校の施設内教育におけるICTを活用した外部との交流授業や、総合学科の高校の情報・ビジネス系列におけるタブレット端末を活用した授業実践の報告をした。また、小・中学校でのScratchによるプログラミング学習や水産高校においてドローンを活用した授業実践の報告をした。

C会場では、工業高校、商業高校においてICTを座学・実習に活用した授業実践の報告をした。その中で、3Dプリンターによる造形作業の実演も行われた。また、中学校の技術の授業や高校の化学実験の授業においてタブレット端末を活用し、実験・実習の手順を確認する等の授業実践の報告をした。

◇第5部会 家庭科指導法（高特）

家庭科における実技指導に関する研究

【発表の概要】

ベテラン教員が有する被服製作と食物調理の実技指導方法における「暗黙知」を丁寧言語化することで、「形式知」としてまとめ、提案した。若手教員の視点でまとめることにより人材育成を目指したこと、ベテラン教員の「暗黙知」に若手教員の新たな気づき等の付加価値を加えて、知見やノウハウの強化を目指したこと及びベテラン教員の意気と若手教員の努力を合わせたことについて報告した。会場内には、実物（被服製作：1/2ボディ、スカートの型紙展開 食物調理：作業手順例、ラミネート資料、ポートフォリオ）を展示し、視覚的な理解を促した。

研究協議は、研究報告と参加者の所属校における実態を踏まえ、「知の継承を進め、生徒の達成感を深める実技指導を行うに当たっての課題と方策」について、参加者の専門分野である被服製作と食物調理に分かれ、協議を行った。

各グループにはファシリテーターとして研究協力委員を配置したことで円滑に協議が進み、若手教員にとっては課題に向き合うきっかけに、ベテラン教員にとっては指導を見直す気づきの場となり、それぞれの考えを深めることができた。また、若手教員が抱える課題について、経験豊富な教員からは「スモールステップで授業を進める」「指導する際は、生徒と向かい合うのではなく、横に並ぶと分かりやすい」など具体的な方策が提案され、情報交換も活発に行われた。若手教員は、自らの力量向上を目指し、自信をもって指導に当たることができるよう自己研鑽に努めること、ベテラン教員は積み重ねた経

験とコツを丁寧に次世代に伝えていくことなど、生徒のために双方の担う役割を再確認した上でモチベーションを向上させながら、意見を交換することができた。

最後に、全体で各グループが協議内容について発表し、共有を行った。

4 教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオについて

○愛知県立長久手高等学校 水野 真子 養護教諭

テーマ「養護教諭が抱く健康相談の職務意識に関する研究

－実務経験年数による差異に着目して－

学校における教育相談は全ての教員があらゆる機会を捉えて行うものであり、養護教諭の行う健康相談も重要である。本研究では、養護教諭の健康相談に対する職務意識を調査し、実務経験年数の差に着目して質的に検討した。養護教諭は経験年数1年目から教育相談的対応や他の職員との連携を心がけており、さまざまな経験を重ねることで視野が広がるとともに視点も変化し、心がけや悩みも変化していく。常に自分の活動を振り返り、評価及び修正を繰り返すことが、養護教諭の成長を促し、生徒への適切な支援につながると考える。

○愛知県立豊田北高等学校（現愛知県立守山高等学校） 立岩 沙和子 教諭

テーマ「予防・開発的教育相談の視点による進路学習のグループワーク開発とその効果の検討」

キャリア教育は予防・開発的教育相談を土台として展開される必要があると考え、予防・開発的教育相談の視点から進路学習のグループワークを開発し、その有効性を検討した。二つのグループワークの実践を通して、主体的に考え、意思決定する力につながる能力や態度を高められることが分かった。ただし、一つのグループワークだけでは偏りなく高めることは難しい。このことから、能力や態度を十分に伸ばすためには、多様な内容のグループワークを組み合わせる必要があると考えられる。

○愛知県立豊橋西高等学校 冠者 貴樹 教諭

テーマ「生徒の訴えを個の現象として捉える教育相談

－精神疾患のような症状を訴える生徒の事例を通して－

教育相談を行うに当たり、支援者が安易に病名や障害で判断せず、本質的な理解が大切であると考えた。そこで、相談者が抱える問題の本質を捉えるにはどのような視点をもつことがよいかを、本質論に関する文献研究と事例研究を通して考察した。支援者は、病名や障害にとらわれず、相談者の訴えを個の現象としてありのままに捉え認めることを理想として、個の理解を追究し続ける視点をもつことが必要であることが分かった。

5 愛知県教育史編さん事業による刊行物の展示

本事業で刊行・完成した「本文編」「資料編」「年表」「資料目録」全巻を展示した。

6 県入選教育論文の展示

平成24～28年度の過去5年間の県教育研究論文入賞者（最優秀賞及び優秀賞）の論文を展示した。